機械学習入門

経済学部 BX584

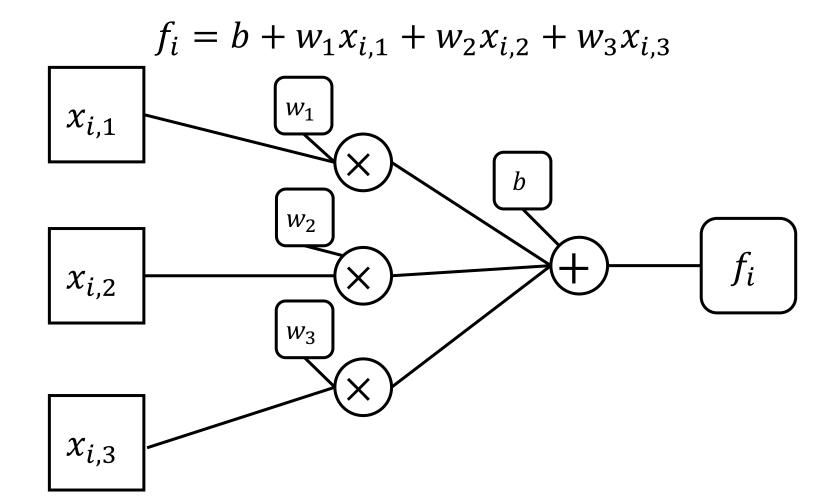
第14回 多層パーセプトロン

おさらい

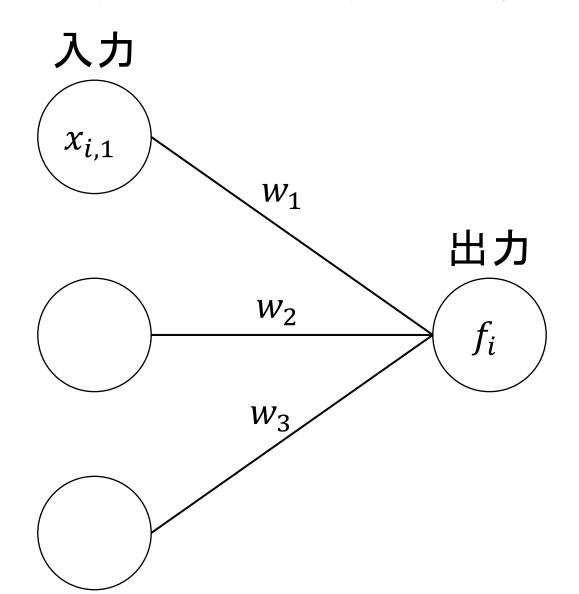
- 教師あり機械学習
 - 理想の出力値を与える「関数」を探す
 - **= 関数のパラメータ設定のうち、できるだけ良いものを探す**
- ・損失関数の最小化として問題を定式化
 - ・ 特定の入力値に対する、理想的な出力値と、実際の出力値との、ズレ
 - ズレを小さくする=出力値を理想的な値に近づける
 - ズレが小さくなる方向にパラメータをうごかしていく=より良いパラメータ設定を探す
- ・ 最急降下法(確率的勾配降下法、ミニバッチ学習)
 - 勾配を使ってパラメータ更新

線形回帰で使った予測モデル

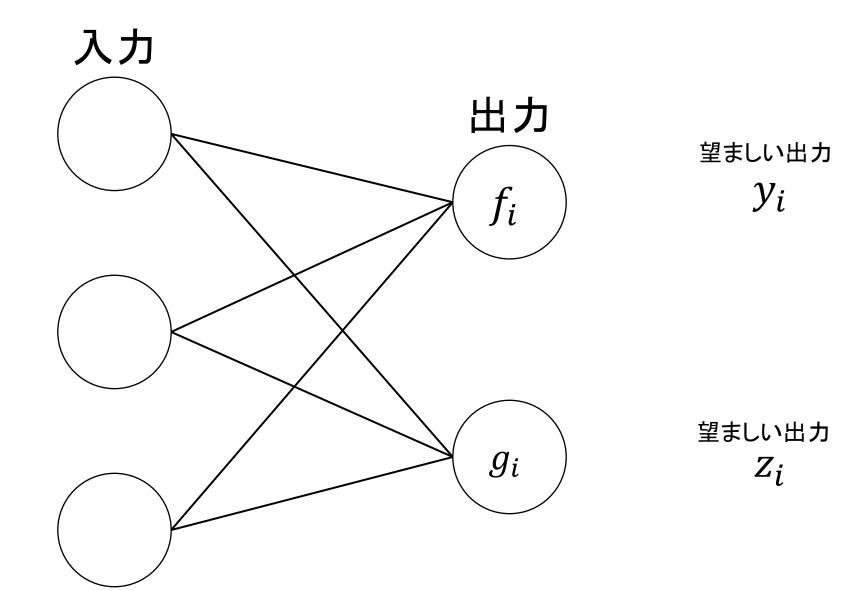
例)明日の終値を、今日含め過去3日分の終値を使って予測



いろいろ略してこう書いてしまうことが多い



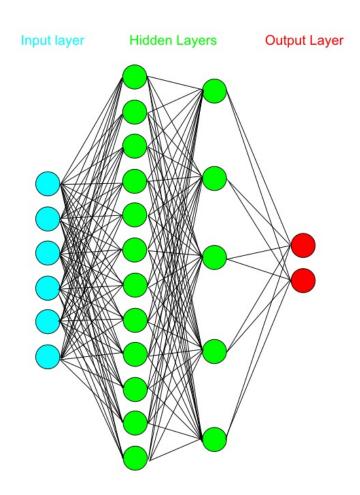
予測したい値が複数あるときは…こうすればいいだけ



ニューラルネットワーク

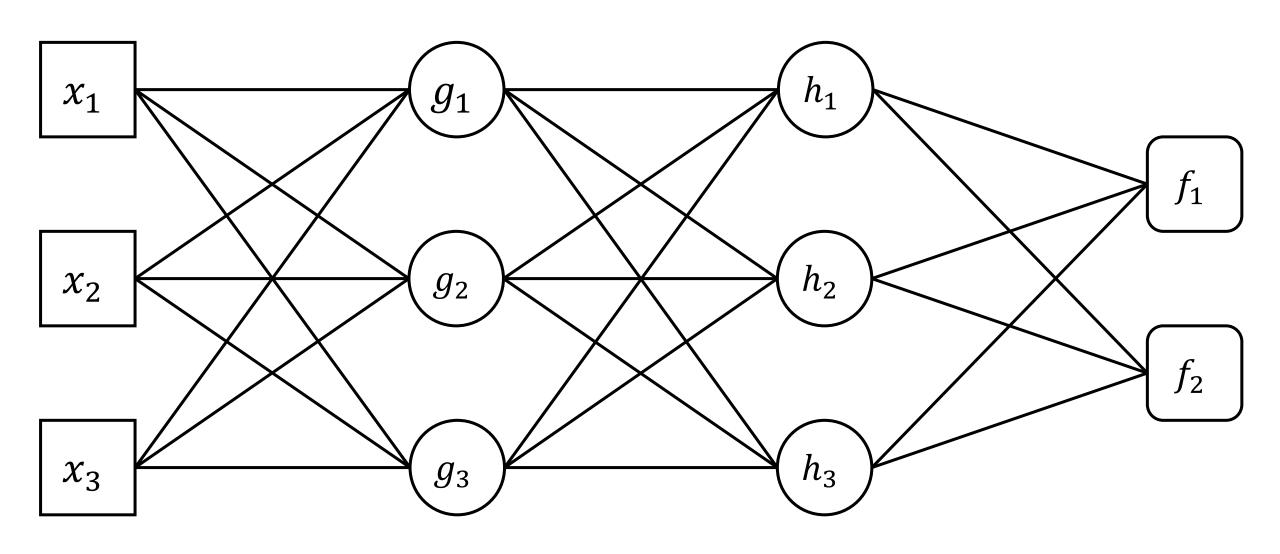
- 入力値に対して理想的な出力値を得るための関数
 - 人間の脳の構造を模倣して云々の話はどうでもよい。
 - 機械学習の世界では関数として使うだけなので。
- 隠れ層のノード数や隠れ層の数を増やすことで構造を複雑にできる
 - 表現力を高くすることができる。
 - ただしこの構造(アーキテクチャ)を決めるのは人間の仕事。
 - 検証データで評価しつつ決めていく。非常に時間がかかる・・・。

多層パーセプトロン(MLP)



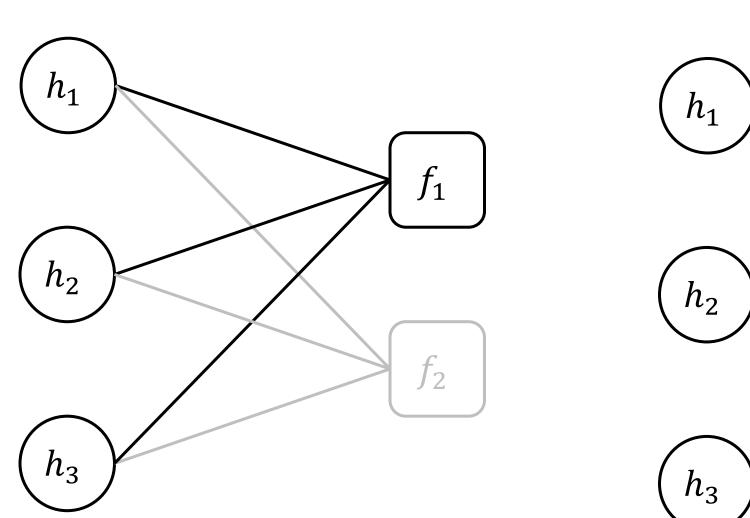
例)入力が3変数、出力が2変数、隠れ層は2層

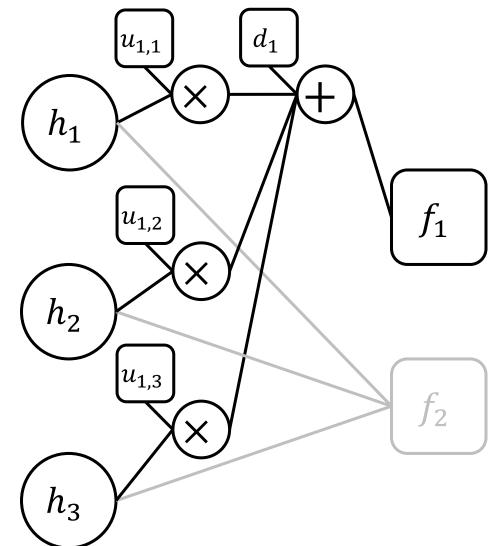
- ・ 例えば、年齢、体重、BMI値からコレステロール値と血糖値を予測
 - 適当に考えた問題設定です・・・。
- ・ 損失関数は2乗誤差とする
 - (損失関数)
 - =(実際のコレステロール値 MLPが出力したコレステロール値)²
 - +(実際の血糖値 MLPが出力した血糖値)²



こういう図、よく目にするけど、どう読むの?

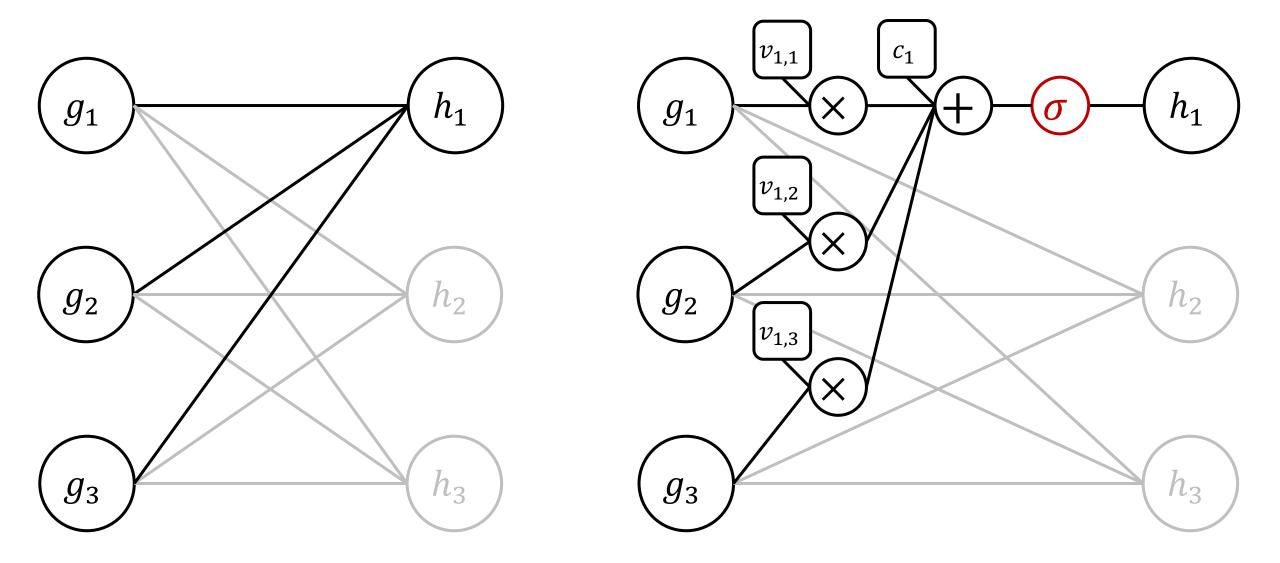
よくあるMLPのこの図は右図の計算グラフの略記!





よくあるMLPのこの図は右図の計算グラフの略記!

(隠れ層の活性化関数も略されている)

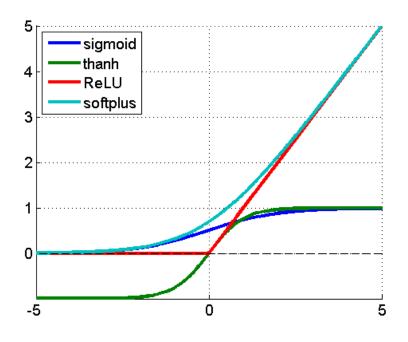


隠れ層の出力に非線形関数(活性化関数)を適用

- なぜ?
 - そうしないと、単層のパーセプトロンとして書けてしまう
 - 行列の積は行列になるため。
 - ・ つまり、多層にしている意味があまりなくなる
 - ただし、非線形関数を使わなくても、中間層の次元が小さい場合は次元圧縮になる。
 - これはこれで意味はあるが、全体が(行列)×(入力ベクトル)という一回の掛け算で書けてしまうことに変わりはない。

活性化関数(activation function)

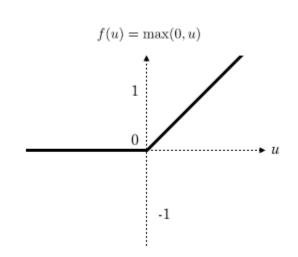
- ・隠れ層のactivation functionにはReLUを使うのが最近は一般的
 - ・シグモイド関数はほぼ使わない
 - ReLUの亜種はよく使う
 - 特にLeakyReLUは使う。



ReLU (rectified linear unit)

$$y = \begin{cases} x & x \ge 0 \\ 0 & x < 0 \end{cases}$$

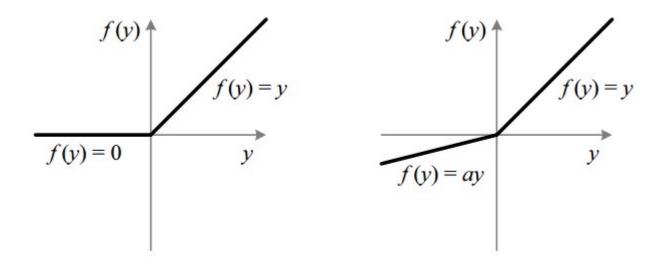
$$\frac{dy}{dx} = \begin{cases} 1 & x \ge 0 \\ 0 & x < 0 \end{cases}$$



- ・微分が1か0かのどちらか
 - 伝播された誤差をそのまま伝えるか、伝えないかのどちらか

LeakyReLU

• 入力が負の場合も勾配がゼロにならないようにしてある

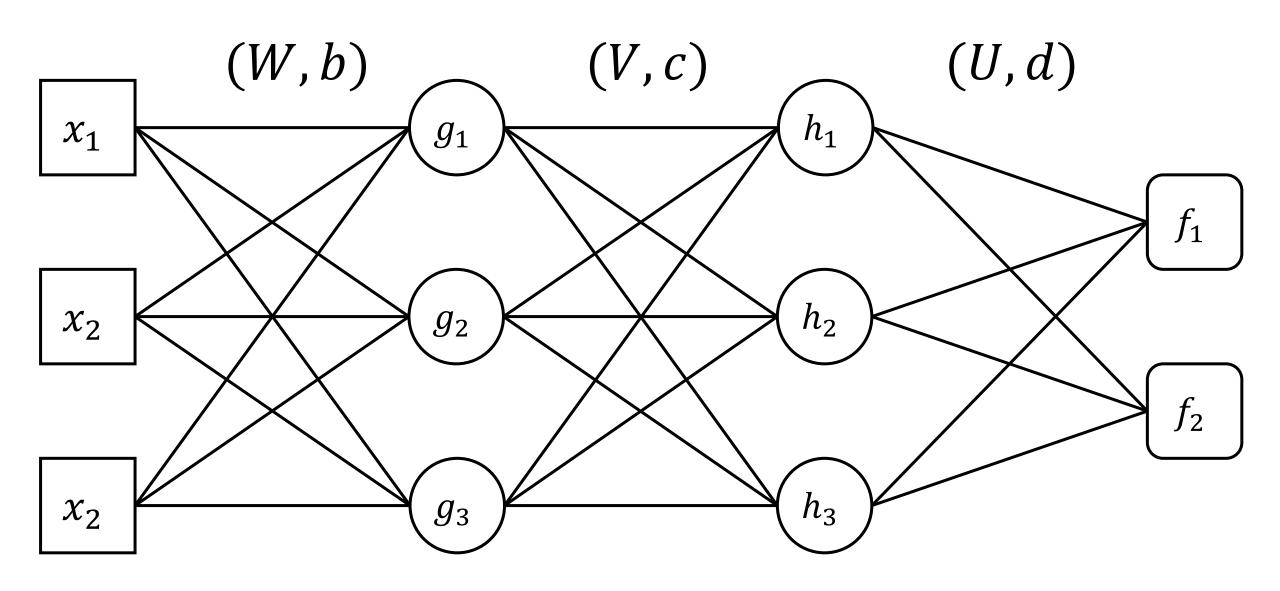


隠れ層の活性化関数になぜシグモイド関数を使わないか?

$$y = \frac{1}{1 + e^{-x}}$$

$$\frac{dy}{dx} = -\frac{-e^{-x}}{(1 + e^{-x})^2} = \frac{(1 + e^{-x}) - 1}{(1 + e^{-x})^2} = y - y^2 = y(1 - y)$$

- ・この微分が誤差逆伝播に良くない(勾配消失問題)
 - $1 \ge y \ge 0$ thus $\frac{1}{4} \ge \frac{dy}{dx} \ge 0$
 - ・ 微分の値が1よりかなり小さい(最大でも0.25)=パラメータが少ししか更新されない
- ON/OFF(1か0か)の"近似"としての使いみちのほうが大きいかも
 - cf. ロジスティック回帰
 - cf. LSTM



この手の図については、辺の重みも、書かれていないバイアスも、省略されている活性化関数も、想像しつつ眺められるようにしておく。

前向き計算

・入力から最初の隠れ層へ

$$g = \text{ReLU}(Wx + b)$$

・最初の隠れ層から次の隠れ層へ

$$h = \text{ReLU}(Vg + c)$$

・最後の隠れ層から出力へ

$$f = Uh + d$$

損失関数(回帰の場合)

• 2乗誤差

• MLPの出力値を (f_1, f_2) 目標となる出力値を (y_1, y_2) とすると

$$L = (y_1 - f_1)^2 + (y_2 - f_2)^2$$

出力が多数(K個)あっても同様

$$L = \sum_{k=1}^{K} (y_k - f_k)^2$$

損失関数(多値分類の場合)

- ・クロスエントロピー
 - ・まずMLPの出力値をソフトマックス関数に通す

$$s_k = \text{SoftMax}(f_k) = \frac{\exp(f_k)}{\sum_{k'} \exp(f_{k'})}$$

・クロスエントロピーは下記のとおり(正解ラベルの項しか残らない)

$$-\sum_{k=1}^{K} t_k \log s_k$$

BP計算例: ReLUを使ったMLPで2乗誤差の場合

• 2乗誤差の場合、目標となる出力値を (y_1,y_2) とすると

$$L = (y_1 - f_1)^2 + (y_2 - f_2)^2$$

・MLPの出力値で偏微分しておく(BPの最初の段階)

$$\frac{\partial L}{\partial f_1} = 2(f_1 - y_1)$$

$$\frac{\partial L}{\partial f_2} = 2(f_2 - y_2)$$

2番目の隠れ層~出力層

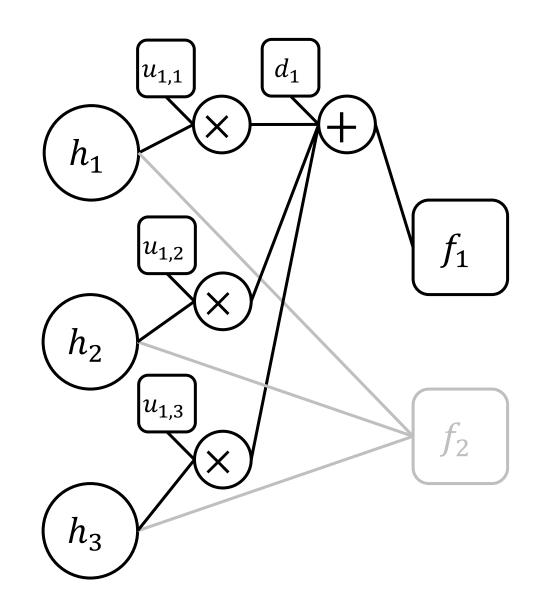
$$f_1 = u_{1,1}h_1 + u_{1,2}h_2 + u_{1,3}h_3 + d_1$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{1,1}} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial u_{1,1}} = 2(f_1 - y_1)h_1$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{1,2}} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial u_{1,2}} = 2(f_1 - y_1)h_2$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{1,3}} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial u_{1,3}} = 2(f_1 - y_1)h_3$$

$$\frac{\partial L}{\partial d_1} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial u_{1,3}} = 2(f_1 - y_1)$$



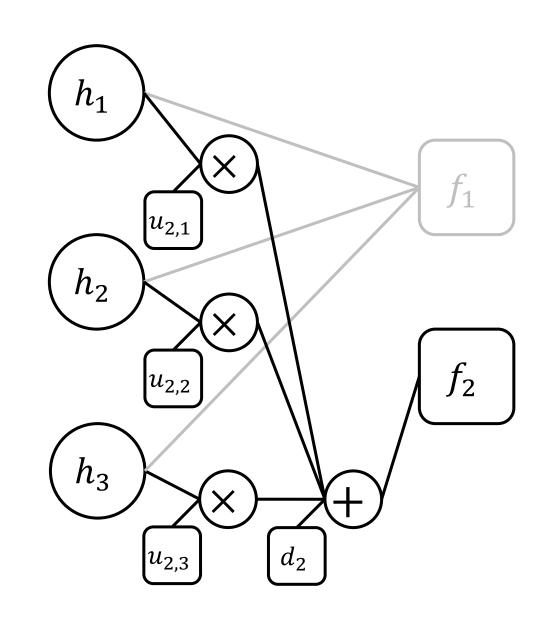
$$f_2 = u_{2,1}h_1 + u_{2,2}h_2 + u_{2,3}h_3 + d_2$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{2,1}} = \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial u_{2,1}} = 2(f_2 - y_2)h_1$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{2,2}} = \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial u_{2,2}} = 2(f_2 - y_2)h_2$$

$$\frac{\partial L}{\partial u_{2,3}} = \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial u_{2,3}} = 2(f_2 - y_2)h_3$$

$$\frac{\partial L}{\partial d_2} = \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial d_2} = 2(f_2 - y_2)$$

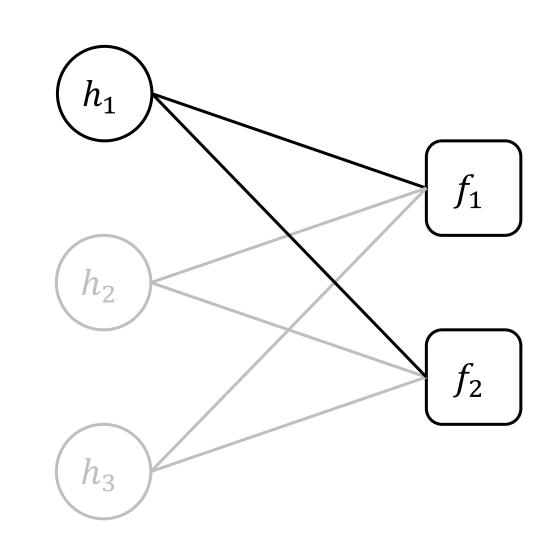


誤差の合流

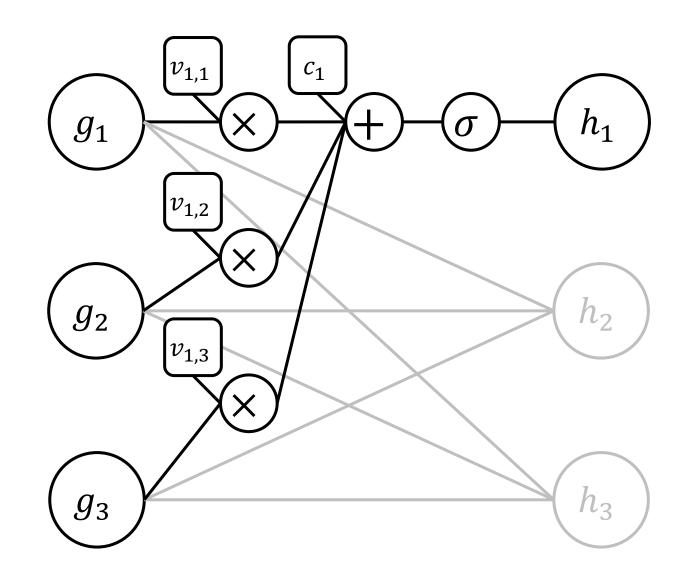
$$\frac{\partial L}{\partial h_1} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial h_1} + \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial h_1}$$
$$= 2(f_1 - y_1)u_{1,1} + 2(f_2 - y_2)u_{2,1}$$

$$\frac{\partial L}{\partial h_2} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial h_2} + \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial h_2}$$
$$= 2(f_1 - y_1)u_{1,2} + 2(f_2 - y_2)u_{2,2}$$

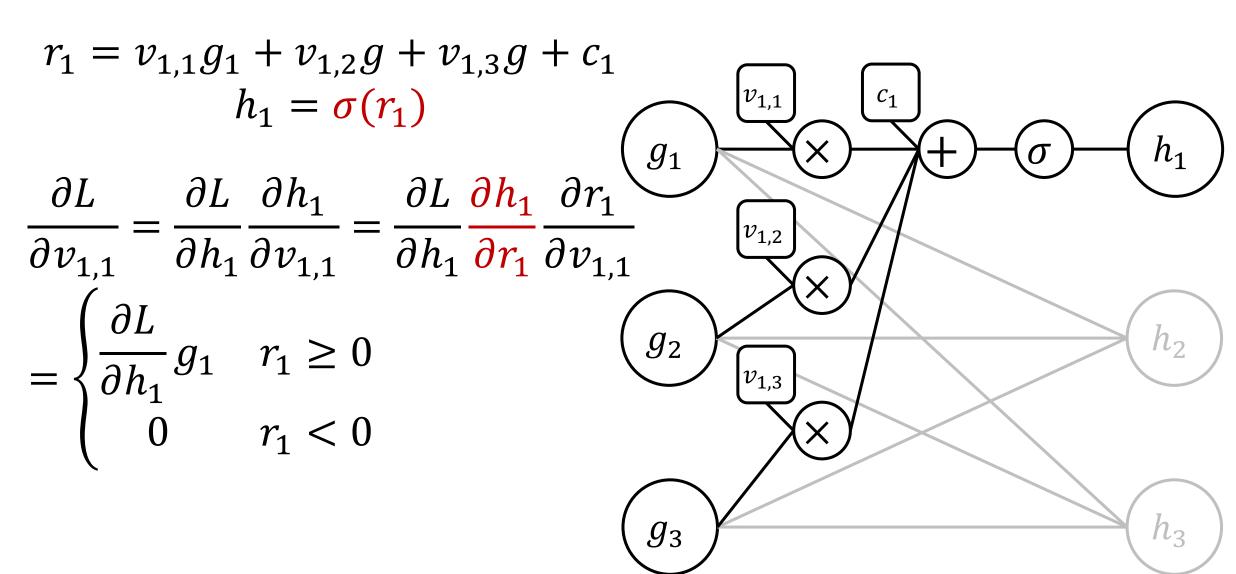
$$\frac{\partial L}{\partial h_3} = \frac{\partial L}{\partial f_1} \frac{\partial f_1}{\partial h_3} + \frac{\partial L}{\partial f_2} \frac{\partial f_2}{\partial h_3}$$
$$= 2(f_1 - y_1)u_{1,3} + 2(f_2 - y_2)u_{2,3}$$



1番目の隠れ層~2番目の隠れ層

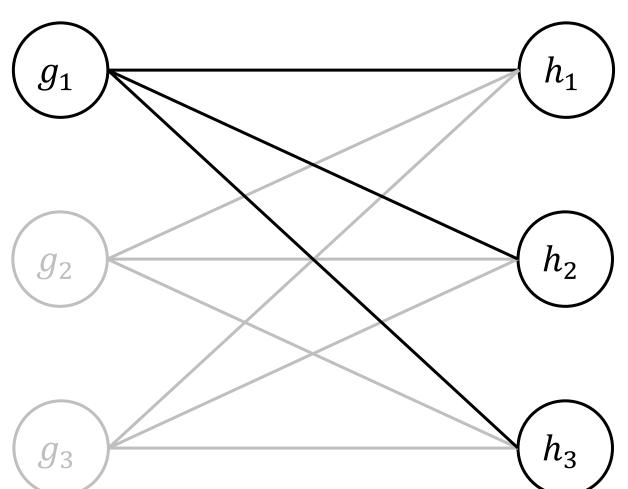


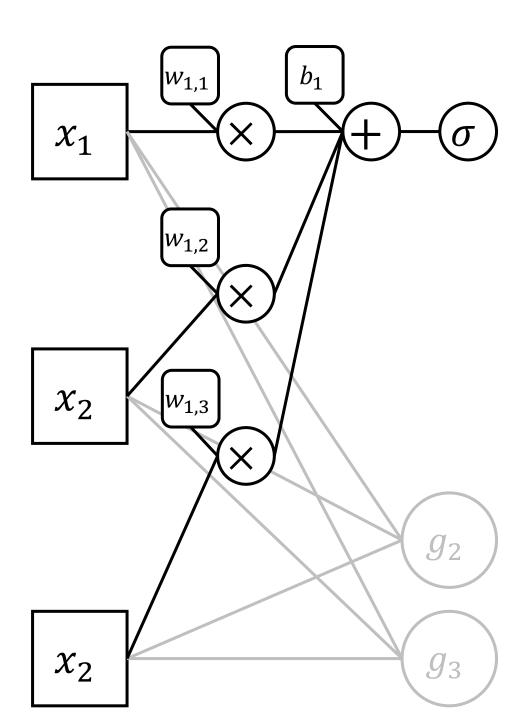
1番目の隠れ層~2番目の隠れ層(続き)



誤差の合流

$$\frac{\partial L}{\partial g_1} = \frac{\partial L}{\partial h_1} \frac{\partial h_1}{\partial g_1} + \frac{\partial L}{\partial h_2} \frac{\partial h_2}{\partial g_1} + \frac{\partial L}{\partial h_3} \frac{\partial h_3}{\partial g_1} \left(\frac{\partial h_3}{\partial g_1} \right)$$





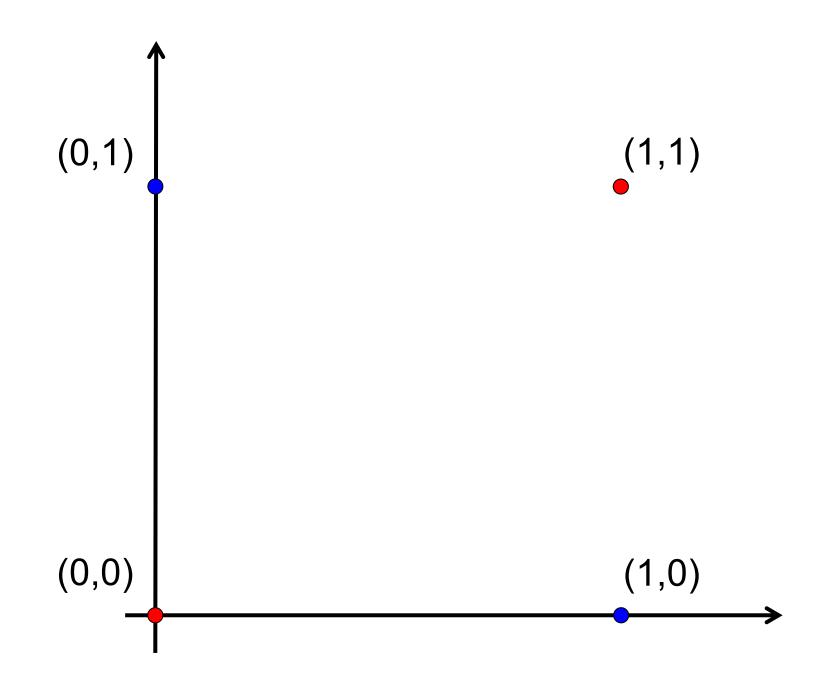
$$q_1 = w_{1,1}x_1 + w_{1,2}x_2 + w_{1,3}x_3 + b_1$$
$$g_1 = \sigma(q_1)$$

$$\frac{\partial L}{\partial w_{1,1}} = \frac{\partial L}{\partial g_1} \frac{\partial g_1}{\partial w_{1,1}} = \frac{\partial L}{\partial g_1} \frac{\partial g_1}{\partial q_1} \frac{\partial q_1}{\partial w_{1,1}}$$
$$= \begin{cases} \frac{\partial L}{\partial g_1} x_1 & q_1 \ge 0\\ 0 & q_1 < 0 \end{cases}$$

自動微分はフレームワークにまかせる

- ・上述のBPは深層学習フレームワーク(PyTorchなど)に任せればよい
- 我々が考えるべきことは・・・(この試行錯誤に手間がかかる!)
 - 学習率をいくらにする?
 - ・ ミニバッチに含まれる訓練データの個数を何個にする?
 - ・隠れ層の数を何層にする?
 - 各層のサイズをいくらにする?
 - 活性化関数をどれにする?(基本的にReLUでよい)
 - Dropoutを使うか使わないか
 - 様々なNormalizationを使うか使わないか

scikit-learnのMLPを使ってみる



パラメータの個数を確認

```
print([c.shape for c in clf.coefs_])
print([i.shape for i in clf.intercepts_])
# coefs_は隠れ層と隠れ層の間の重み
# intercepts は各隠れ層でのバイアス
```

分類境界の可視化

```
import numpy as np
import matplotlib.pyplot as plt

x1, x2 = np.mgrid[0:1:101j, 0:1:101j]
X = np.c_[x1.ravel(), x2.ravel()]
fig, ax = plt.subplots()
im = ax.imshow(clf.predict(X).reshape(101,101))
plt.show()
```

課題

- 多層パーセプトロンを使って、MNISTデータを0から9までの10種類の 画像に分類してみよう
- 検証データによる評価を使って、良いアーキテクチャを探そう
- テストデータで予測を行い、confusion matrixを作成しよう

Confusion matrix (混同行列)

- 真のラベルと予測ラベルの対応 関係を表にしたもの
 - 真のラベルがAであるテストデータについて、予測もAだったものの個数、予測がBだったものの個数、予測がCだったものの個数、等々を表にする。

